

大津波の後で

「週末寸言」原稿 20110820

孟蘭盆の最後を飾る送り火。船形に盛った盆飾りを家族総出で海岸で焼く。三陸地方で広く行われている風習のようです。迎え火に招かれて家族のもとに帰ってきた死者の魂は、再び海に還っていくことが暗示されています。西方浄土は、この海の果てに有ると、この地方の人々は考えてきたのかも知れません。今年の盆は殊のほかに想いの濃いものとなりました。新しい霊が西方浄土から初めて還ってくる新盆法要が万余の数で行われたからです。肉体がまだ水漬く屍となつて海底に横たわっている行方知れない霊も数知れず有りました。そんな中、多くの霊は、あの大津波の引き波を逆さにたどる道を我が家へと帰ってきたのでしよう。

柳田国男の『遠野物語』には、津波で死んだ女房と再会した夫の話があります（第30話）。主人公は土淵村から田の浜へ婿に来た福二という男。ある夏の夜中、海辺にある厠に立つと、霧に覆われた海面に一組の男女が現れます。女は先の明治三陸大津波で死ん

だ妻。そして、彼女の傍らに立つ男は福二が婿に入る以前に、妻が愛した恋人でした。あの世でこの男と再婚しました、と妻は告げます。この世で果たせなかつた愛を、大津波のおかげであの世で成就できたというわけです。「残していった子供たちがかわいくないか？」と尋ねる夫に、妻はただ泣くだけでした。

この物語の文末は、「死したる人と物言ふとは思はれずして、悲しく情けなくなりたれば足元を見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山蔭を廻り見えずなりたり。追ひかけて見たりしがふと死したる者なりしと心付き、夜明まで道中に立ちて考へ、朝になりて帰りたり。その後久しく煩ひたりといへり」で閉じられています。

明治三陸大津波は、幸薄かつたみちのくの女に淡い幸せを持ってきてくれたのでしようか。それとも、霧立つ海面に妻と男の影を見たのは生き残つた夫の邪念だったのでしょうか。逝く者と残る者の心の深奥をこの話は語っています。平成の大津波には、はたしてどんな哀しい話が詰まっているのでしょうか。